

平成 21 年 6 月 18 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18739003

研究課題名（和文） 子どもにおける自己 - 他者間の葛藤調整の発達とその要因の検討

研究課題名（英文） Mental negotiation between selves and others among children.

研究代表者

平井 美佳（HIRAI MIKA）

東京女学館大学・国際教養学部・講師

研究者番号：60432043

研究成果の概要： 本研究は、幼児期の子どもたちが、ともに重要な自己と他者の両者の要求が葛藤する場合に、どのように調整を行うか、また、その調整はどのように発達するのかを明らかにすることをねらいとした。架空のジレンマ場面を用いた面接調査を行った結果、全体的には年齢が上がるに従って自己主張が減り他者優先的になるという従来どおりの傾向が見いだされた一方で、幼児であっても場面の相手や問題の重要度に応じて、自己と他者の調整を行うことが明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度			
2007年度			
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：自己と他者の調整，幼児，自己，自己調整，人間関係，セルフ・アサーション

1. 研究開始当初の背景

主に西洋を中心として発展してきた心理学において、発達とは伝統的に個としての親や他者からの独立、自立として捉えられがちであった。一方、対人関係に関する研究は重要な他者との関係が適応にとって重要な役割を果たすことを明らかにしてきた。つまり、「個としての自己の独立性」と「重要な他者との関係性」は人間の発達や適応にとってともに重要であるといえる。この人間の二重性（duality）の問題は古くから議論はされては

きたものの（e.g., Bakan, 1966；Erikson, 1950），実証的研究においては個別に扱われることが多かった。

これに対し、平井（2000，2006）は、「自己」と「他者」の両者が同時に関連した状況において、人がどのように両者のバランスを取ろうとするのか、また、それがどのように発達していくのかについて、大学生や高齢者を対象に、ジレンマ場面を用いた面接調査により検討してきた。その結果、人々や場面の状況（ジレンマの相手や深刻）に応じてともに重要な自己と他者の調整を行うことを明

らかにした。すなわち、自己と他者の要求が葛藤するジレンマ場面において、相手が家族なのか友人なのか、また、問題がどの程度自分にとって重要なのかといった場面の性質に応じて、人々は時には自己を主張し、時には相手を立てるというように、状況に応じた「自他の調整」を行うことを明らかにした。さらに、この状況に応じた自他の調整が心理的適応と関わることも示唆された（平井，2005）。

それでは、このような自他の調整は、人間の発達過程において、どのように獲得されていくのであろうか。

この問いに関連する先行研究としては、自己調整（self-regulation）や対人葛藤（interpersonal conflict）に関する研究が挙げられる。しかし、自己調整に関する研究（e.g., Baumeister & Vohs, 2004; Bronson, 2000; 柏木, 1988）では、あくまで自己の抑制に主眼が置かれていることが多い。また、対人葛藤に関する研究では、幼児が単純で一方的な自己主張から他者への配慮や規範に基づいた相互協調的な態度が取れるようになるという発達の図式を示しており（e.g., Selman, 1980）、これらの研究では対人関係の質（親しい～親しくない）が考慮されている場合があるものの、扱う対人関係は主に友人であり、また、対人関係の質や対人行動を規定する主体としての自己という視点が欠けているように見受けられる。加えて、さらに、対人関係の発達研究では、子どもが異なる他者と異なる関係を持つことを示している（e.g., Takahashi, 2004）が、それらの対人関係の質がより実際の対人行動方略にどのように影響するかについては十分に検討されていない。

よって、平井がこれまで大学生や高齢者を対象として検討してきたように、子どもにおいても、「自己」と「他者」のバランスの問題を扱う必要があると考えられる。

なお、臨床領域では、「セルフ・アサーション」という自他尊重の自己表現が注目されてきたが、この概念については研究（e.g., 柴橋, 2001, 2004）はあるものの、全体としては実践に重きが置かれ、加えて、幼児を対象とするような発達研究は、見受けられない。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、幼児期の子どもにおける自他の調整の発達について、自己と他者の要求が葛藤するジレンマ場面を用いた面接調査を行い、次の3点を検討することを目的とした。

（1）幼児期の子どもたちにおける自他の調

整の様相について明らかにする。より具体的には、幼児も状況に応じた自他の調整を行うのか、行うとすればどのような状況において自己または他者を優先せるのかについて検討する。このために、異なる場面の状況（場面の性質、葛藤する他者とは誰か）を用いて、状況に応じた調整の様相について明らかにする。

（2）状況に応じた自他の調整が、幼児期を通してどのように発達していくのかについて明らかにする。すなわち、いつ頃から、どのような方略が登場し、それらの方略がどのようにして多様になっていくか、また、それらがどのように使い分けられるようになっていくのかについて検討する。

（3）上記の自他の調整の発達に関わる認知的、対人关系的、および、社会的要因について検討する。すなわち、子どもらが選択する行動方略の背景として、どのような認知的リソース（言語発達、心の理論）の発達、自己概念の発達、および、異なる種類の対人関係（親、きょうだい、友人、教師）との関係の質が影響を与えているのかについて検討する。

なお、幼児期の子どもを対象とした面接に加え、対象となった子どもの親および担任の教師・保育士に対しても質問紙調査を行い、子どもの面接における発話内容との関連を検討した。より具体的には、親と教師・保育士から見た日頃の子どもの行動、また、親自身の養育態度（発達期待、育児ストレス）についても情報を収集し、架空のジレンマ場面に対する子どもの回答の妥当性について検討した。

3. 研究の方法

幼児を対象として、個別の半構造化面接を行った。平均面接時間は25.36分（SD = 4.78）であった。

（1）調査協力者

東京都内の幼稚園・保育園に通う幼児、計104名。その内訳は、年少の女兒5名・男児8名の計13名（平均月齢49.23か月、SD = 3.22）、年中の女兒30名・男児20名の計50名（平均月齢62.46か月、5歳、SD = 3.69）、そして、年長の女兒27名・男児17名の計44名（平均月齢74.70か月、SD = 3.54）であった。面接の調査時期は2007年12月から2008年3月であった。

なお、上記の調査対象では男児の協力者数がやや少なかつたため、2009年3月に7名の年中・長の男児に追加で協力を得た。さらに、

2007年2月には、タイのバンコクにある日本人幼稚園に通う、女子7名(年中3名、年長4名)・男子11名(年中7名、年長4名)の計18名からも協力を得た。しかし、本報告書ではこれらのデータは分析に含めない。

さらに、幼児の面接とは別に、幼児の保護者と、幼稚園・保育園の担任の教師・保育士に対象となる子どもに関する質問紙調査を依頼した。保護者については、年長で31名、年中で40名、年少で12名の第一養育者から回答を得た。また、計15名の担任の教師・保育士からも協力を得た。

(2) 調査内容

幼児の面接調査

自己と他者のジレンマ場面(4場面)

自己と他者の両者の要求が葛藤するような4つのジレンマ場面を作成した。場面は葛藤の相手が友人の場合(ケーキ課題・おもちゃ課題)と母親の場合(お昼ごはん課題・お出かけ課題)の各2課題であった。個別の半構造化面接により「もし ちゃんだったらどうするか」また「それはどうしてか?」について尋ねた。以下に課題例を示す。

【おもちゃ課題(友だち)】

ちゃんが今大事にしている、宝物にしているおもちゃは何か?教えてくれる?(協力者が回答) ちゃんが今日お家に帰ったらそれで遊ぼうって思っていたとしましょう。そのことをちゃんに話したら、ちゃんが「それ貸して、お家に持って帰って遊ばせて」と言ったの。そしたら、ちゃんはどうするかな?どうして?

なお、現実的に考えてもらうために初めに挙げてもらった「一番好きな友達(できれば同性)」を場面に登場させる、好みや大切なものを予め聞くなどの工夫を行った。また、課題の作成時には、従来の自己調整研究において多く見られるような、他者が自己の妨害をするような場面(例:ものを奪われる、割りこまれる)ではなく、どちらにも非はなく、両者の要求が葛藤するような場面となることに配慮した。

認知的要因の検討

心の理論課題のうち Content False Belief 課題、および、絵画語彙発達検査(PVT)を実施した。また、自己認識について自己理解面接(Damon & Hart, 1988)を実施した。

社会的要因の検討

絵画愛情関係テスト(PART, Takahashi, 1978-2002)を用いて人間関係の枠組みについても検討した。これは、15場面ですべて「誰にも

っとも一緒にいてほしいか」を問うもので、子どもの対人関係の多様性、および、最も愛情要求を向けている人について検討が可能となる。また、本人および母親から、きょうだい数、同居の家族人数についても確認した。

母親と教師・保育士の質問紙調査

面接の対象児について日頃(ここ1-2カ月間)の自己主張的および自己抑制的な行動の程度を「あてはまる(大体いつも見られる)」から「あてはまらない(ほとんどない)」の5段階で尋ねた。尺度は、首藤(1995)および大内(2008)を参考にしながら、独自の尺度を作成した。また、この尺度の同じ項目について、「どの程度あってほしいと思うか」という発達期待についても評定を求めた。

母親については、育児ストレス尺度(長谷川, 2006)への回答を求めた。また、最後に育児で困っていることや対象児について気になることについて自由に記述してもらった。

4. 研究成果

(1) ジレンマに対する回答

回答内容が「自己を優先する」「他者を優先する」「中立(どちらともいえない)」かに分類した結果を、葛藤の相手が友だちの場合については図1に、家族については図2に示した。

まず、友だちとの場面(図1)においては、おもちゃ課題よりもケーキ課題において自己を優先させると答えた割合が高いことがわかる。なお、ケーキ課題では「じゃんけんする」といった中立に分類される回答が多かったため、最終的には自己と他者のどちらかを選択させた。自己を選ぶ子どもも僅かにいたが、ほとんどは「友だちに譲る」という回答であった。

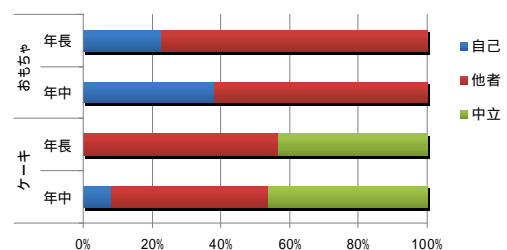


図1: 2つの友だち場面への回答

次に、家族との場面(図2)においては、先の友だち場面ほど明白な場面による違いは見られなかったが、やはり年長よりも年中

の方が自己優先的な回答をした。

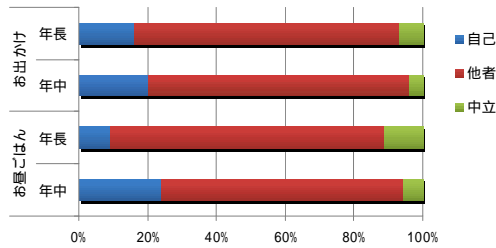


図2：2つの家族場面への回答

(3) 行動選択の理由

上記の回答の理由について尋ねると、以下のような特徴が見いだされた。おもちゃ課題における回答のみを表1に示す。

表2：おもちゃ課題に対する回答

	理由	年長		年中	
		n	%	n	%
自己主張的	宝物だから、大切だから、私のだから	8	16.0	13	29.6
	失くされる、壊される	4	8.0	4	9.1
	一緒に遊ぶならいい	5	10.0	3	6.8
	自分ので遊んでもらう、買ってあげばいい	2	4.0	1	2.3
	理由なし、困る	1	2.0	1	2.3
他者尊重的	貸りたい、遊びたいと言っている	5	10.0	5	11.4
	かわいそう、泣いちゃう	7	14.0	1	2.3
	喧嘩になる、喧嘩しない	1	2.0	1	2.3
	少しだけなら、すぐ返してくれるなら、優しく使うなら	2	4.0	13	29.6
	いつも(相手は)優しくしてくれるから	3	6.0	0	0.0
	別のおもちゃで遊ぶ、使わないときもある	6	12.0	10	22.8
	使ってみてほしいから	2	4.0	1	2.3
	(私は)やさしいから	1	2.0	0	0.0
	友だちに貸してあげないのはいけないから	2	4.0	1	2.3
	理由なし	1	2.0	4	9.1

年中よりも年長において、他者と関係維持しようとする他者志向的理由づけ(例：喧嘩したくないから)、また、今後のプラン(例：今度は私が貸してもらおう)や条件付け(例：明日返してくれるなら)に関する言及が多くみられた。逆に、年長よりも年中で多かったのは、自分にとっての大切さを挙げる(例：宝物だから)、欲求をすり替える(例：やっぱりこっち食べたい)、気を紛らわす(例：ほかのおもちゃで遊ぶからいい)などの方略が相対的に多くみられた。さらに、年齢が高いほど、理由づけの内容が多様になるという傾向も見出された。

(3) Self 得点と0得点

さらに、上記の分類とは独立に、回答内容

全体について「自己を配慮する程度(Self得点)」と「他者を配慮する程度(Other得点)」を独立に、0~2点(全く言及しない~かなり言及する)で評定し、月齢に従って3群別に見た結果を図3に示す通りとなった。特に友だちとの課題において、年齢が上がるに従って自己抑制的に、逆に、年齢が下がるに従って自己主張的であることがわかる。しかし、家族(母親)との課題についてはこの限りではない。

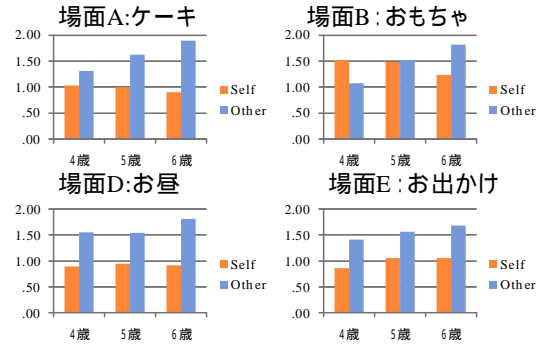


図3：Self得点とOther得点の平均

以上の結果から、第1に、年齢が上がるほど自己優先的な回答が減り他者優先的な解答が増加するという発達の傾向があること、第2に、選択された行動の理由は、年齢が上がるに従ってより多様となり(特に友だちとのジレンマにおいて)、優勢となる方略も異なること、そして、第3に、自己/他者優先的な程度は場面の性質(重要度)や相手(家族、友人)によって異なることが明らかとなったといえる。すなわち、幼児期の子どもであっても、自己と他者の要求が葛藤するジレンマ場面に際して状況に応じた調整を行うこと、そして、その調整は幼児の年齢が上がるに従って変化していくことが明らかとなった。

(4) 認知・社会的要因との関連

上述のSelf得点・Other得点の総和を「アサーティブ得点」として、算出した。この得点は、全体として自己にも他者にも言及する程度を示す。この得点と他の認知・社会的要因との関連についても検討したところ、当然ながら月齢($r = .39$)や言語発達($r = .38$)との正の相関が、また、自己概念の発達レベル($r = .42$)、および、非家族のネットワークの有無(PARTにおける非家族選択数, $r = .24$)や人間関係の多様さ(PARTで挙げられた他者の種類, $r = .25$)との有意な相関が認められた。

(5) 本研究の意義と今後の課題

本研究は、幼児期における、状況に応じた自己と他者の調整を明らかにした。全体的には、これまでに先行研究で見いだされてきた、

自己主張が停滞し自己抑制が可能になるという発達の図式を確認するとともに、これまでの研究では見いだされなかった、子どもの主体的な調整、また、その発達の様子をとらえることができたといえる。より具体的には、たとえば、年長になると、友だちとの関係を維持するために自分の食べたいケーキを我慢するが、大切な宝物のおもちゃを貸してと言われたときは、相手にきちんと理由を説明して断る、あるいは、条件をつけて貸すなどという回答が見られた。すなわち、幼児であっても、ともに重要な自己と他者を、状況に応じて調整しているということが確認されたといえよう。

今後の課題としては、本研究のデータについても、異なる分析枠組みなどを用いた更なる発話の分析が必要であろう。また、本研究の面接から得られた発話と、親や教師の観察する日常の行動との関連などを検討することにより、本研究で用いた方法の妥当性を確認するべきであろう。さらに、本研究で見いだされたような自己と他者の調整方略の発達に伴う内容の変化や種類の増加が、幼児期以降にどのように発達していくのか、また、この調整のありようと心理的適応との関連について検討していくことも有用であろうと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

1. 平井美佳(2009) 幼児におけるセルフ・アサーション ジレンマ場面における回答と認知・社会的要因との関連 日本発達心理学会第20回大会 日本女子大学 2009年3月

2. 平井美佳(2008) 幼児における自己と他者の調整 ジレンマ場面を用いた面接による検討 日本教育心理学会第50回総会 東京学芸大学 2008年10月

3. 平井美佳(2008) 幼児における自己と他者の調整 ワークショップ: 子どもにおける自己と他者: 言語報告による検討 話題提供 日本心理学会第72回大会 北海道大学 2008年9月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平井美佳 (HIRAI MIKA)

東京女学館大学・国際教養学部・講師

研究者番号: 60432043